

最初に恩寵がある：キルケゴールにおける聖書と教会

鹿住 輝之

1. はじめに

キルケゴールについて一般的な理解を求めるために、いくつか辞書を引いてみると、その多くの中に主体性という言葉が見いだされる。それらの中でキルケゴールは、客観的な真理基準に対して主体性の優位を説いたとされ、実存や内面性等、個人に関わる多くの概念と結びつけられている*1。そのような記述からは、キルケゴールは主体性のみを真理基準とし、客観的なものに否定的な態度のみをとったような印象を受ける*2。

確かに『哲学的断片への結びの非学問的後書き』においてキルケゴールは「主体性が真理である」とし、「真理の規定は客観性への対立の表現を含んでいなければならない」と述べている*3。そこでは聖書や教会といった客観的なものに対する知識の上に永遠の浄福を築くことは不可能であるとされ、そのような知識は近似値にしか至らないとされる。確かにここでは真理に対する客観的な関り方が否定されている。しかしキルケゴールにとって客観的なものは単に批判されるのみのものだったのだろうか。

*1 以下の辞書を参照した。『哲学辞典』、荒川幾男（他）編、平凡社、1971年。『岩波哲学思想辞典』、廣松渉（他）編、岩波書店、1998年。*Philosophen-Lexikon Leben, Werke und Lehren der Denker*, R. Eisler, ed., Topos Verlag Ag, 1977. *The Cambridge Dictionary of Philosophy*, R. Audi ed., Cambridge University Press, 2015. *The Oxford Dictionary of Philosophy*, S. Blackburn ed., Oxford University Press, 2016.

*2 例えば *The Cambridge Dictionary of Philosophy* では、キルケゴールは「意志や自由な選択の始原性を強調した」(p. 261) とされ、「人間の行為や判断が関わる場所には、客観的なもの、外的な基準や権威は存在しない」(p. 261) としたとされる。

*3 キルケゴールからの引用は *Søren Kierkegaards Skrifter* の巻数と頁数を示した。日記からの引用は *SKS* の巻数、頁数に加え、日記に付される分類番号も示した。*SKS* 7, 186.

2. 客観的なものについてのキルケゴールの評価

1853年の日記の中に「直接的神-関係；最初の、すなわち最初の恩寵；客観的なもの (Et umiddelbart Guds-Forhold; Naaden paa første Sted eller forlænds; det Objektive)」というエントリーがある。そこで以下のように書かれている。

我々一般的な人間は直接的な神-関係を持たず、それゆえ無条件なものを無条件に表現することができなかつたので、継続的に恩寵を必要とし、また先に必要とする。なぜなら最も誠実な始まりはいつも理念的な要求と比較された不完全性、つまり新たな罪としての不完全性であるのだから。つまり最初に恩寵がある (Naaden paa første Sted)。*4

先の否定的見解とは異なり、ここで客観的なものは、キルケゴールを含む一般的な人間にとって、神と関係を持つために必要不可欠なものとされている。すぐ後のエントリーでこの「最初に恩寵がある」という事態は、「客観的なもの、すなわち sacrament と聖書との関係において当てはまる」と詳しく説明され、聖餐式や洗礼の sacrament や聖書に結びつけられる*5。一般的な人間は、直接的な神-関係を持つ者、すなわち啓示によって召命された者とは異なり、神との関係に入るために sacrament や聖書といった客観的なものを必要とする*6。そして召命を受けない者にとって、それらは「最初の恩寵」として与えられるのである。

キルケゴールは、客観的なものの例として聖餐式を挙げ、以下のように述べている。

*4 SKS 25, 223, NB28:12.

*5 Otto Bertelsen は『教会的キルケゴールと「反教会的」キルケゴール』において「キルケゴールの思考世界のなかで、キリスト教は客観的な側面を持つのであり、それは第一に sacrament、とりわけ聖餐式に結びついている」とし、キルケゴールが聖餐式を重要視していたことを指摘している。Otto Bertelsen, *Den kirkelige Kierkegaard og den „antikirkelige“*, København: C. A. Reizels Forlag, 1999. s. 38.

*6 直接的な神-関係を持つ例としてパウロが挙げられている。「パウロは啓示によって、つまり神への直接的関係によって召命された」(SKS 25, 219, NB28:7)。

聖餐式を例にとろう。私は今祭壇へむかおうと考える。私はその時、これまで私がそれに値するように祭壇へと向かうことに成功していなかったことを認める。このことを私が後悔するなら、恩寵は私に与えられる、これは第二の恩寵 (Naaden paa andet Sted)、過ぎ去ったものとの関係における、後の恩寵である。^{*7}

ここで言われるように「第二の恩寵」は、それ以前に「祭壇へ向かうことが成功しなかった」という後悔によって生じるものである。ここで使われている語、「後悔する (fortryde)」は、『あれかこれか』等で重要な意味が与えられる「悔いる (angre)」と異なる語であるが、同様に主体的な選択に伴って現れるネガティブな感情を表す語であると考えられよう。例えば『あれかこれか』において、悔いは自己を選択し、戦った後に現れる「獲得の表現」とされる^{*8}。そのように考えるならば、「第二の恩寵」は人格や自己をめぐる主体的な選択と関わるものと言いうる。しかしこの「第二の恩寵」が生じるためには、聖餐式や聖書といった客観的なもの、すなわち「最初の恩寵」が与えられていなければならない。

聖餐式についての記述は、洗礼についての記述と共に『愛の業』においてもみられる。そこでは次のように述べられている。

あなたは自身が洗礼によって救われていると信じるために、神に助けを求めなければならない。あなたは自身が聖餐式で恩寵によって罪の赦しを得ると信じるために、神に助けを求めなければならない。なぜなら確かに罪の赦しが約束され、あなたにも約束されるが、牧師があなたに対し、あなたは信仰を持っていると言うことは許可されていないのであり、罪の赦しはあなたが信じる限りで、約束されるのだから。^{*9}

^{*7} SKS 25, 224, NB28:14.

^{*8} SKS 3, 207.

^{*9} SKS 9, 372.

この記述において信仰の確かさを得るために必要なものは「神の助けを求めること」とされている。確かにここで、強調点は、聖餐式や洗礼によって救いを確証するためには、その参加者の主体的信仰が必要であるということにおかれている。しかし同時にそこでは聖餐式や洗礼という客観的なものも不可欠なのである。ここでも洗礼や聖餐式という客観的なもの、つまり「最初の恩寵」に対して、神に助けを求めること、「第二の恩寵」が現れるという構造を見ることができるのである。

聖餐式について『キリスト教講話』の第四部、「金曜日の聖餐式における講話」において多くの言及がなされている。そこで七つの聖書解釈を通して聖餐式について述べられるのだが、特に七番目の聖書解釈、ルカによる福音書二十四章五十一節の「祝福しておられるうちに、彼らを離れられた」という聖書記述に対する解釈において、祝福と人間の無力さが主題となっている。キェルケゴールによれば、聖餐式において人は、自身が「無価値であるという考えを保持すること、そしてその中で祝福をうけいられるようにすることさえできない」のであり、「恩寵と祝福を必要としているという意識」を抱くことさえできない*¹⁰。そのような自身が無価値であるという意識を受け入れさせ、同時に祝福を与える者がキリストである。

ただ人格的にそこにいる彼〔キリスト〕のみが祝福を伝えることができる。彼は単に祝福を伝えるだけでなく、彼が祭壇における祝福である。*¹¹

この記述において人間の主体性それ自体の無力さが強調されている。聖餐式において祝福を伝えるのはキリストであり、祝福を必要とするという意識を抱くことでさえ、そのキリストによって可能となるとされている。聖餐式は、人がそのような無力さをキリストによって感じることができるようになる場である。したがってここでは「最初の恩寵」がなければ、主体的な関わりも起こりえないという、「最初の恩寵」の優位性について述べられているのである。

*¹⁰ SKS 10, 324.

*¹¹ SKS 10, 325.

このようにキルケゴールは、聖餐式や洗礼といった教会に関わる客観的なものに対する肯定的な記述を多く残している*12。また後述するように、啓示と関わる説教、聖書についても既存の教会との関係の中で扱われている。もちろんキルケゴールは、それら客観的なものに対する主体的な関わりも要求しているのだが、しかし教会や聖書の存在は否定されるものではない。むしろ教会と聖書は、前述のように主体的関わりに先立って存在する必要不可欠なものなのである。そして以下に見るようにそのような客観的なものは、既存の体制(Bestaende)との関係で述べられる。次節では、既存の体制に対するキルケゴールの関わりを見ていきたい。

3. 既存の体制に対する「修正剤」としてのキルケゴール

キルケゴールは1849年の「既存の体制に対する修正剤と見なされる私の産出力(Productivitet)」というエントリーにおいて、自身の役割を既存の体制に対する「修正剤(Correctiv)」としている。そこでは修正剤という規定性は「こことそこ、右と左のような反省の規定性」とされ、「修正剤をなす人間は正確かつ徹底的に既存の体制の弱点を学び、そのうえで反対のものを一時的に措定する」*13とされる。

このようにキルケゴールは自身の役割を既存の体制を修正剤と見なした。そしてそのような修正剤は、既存の体制との関係の中ではじめて意味を持つものである。

キルケゴールは1851年に既存の体制を代表するミュンスターと自身との関係について「ミュンスターと私との関係の今」*14というエントリーの中で述べて

*12 教会攻撃の以前キルケゴールは熱心に教会へ通っていた。Otto Bertelsen, op. cit., s. 38. キルケゴールは教会について以下のように述べている。「アウグスブルク信仰告白に見出される、教会は聖なる共同体であり、そこで正しく聖書が学ばれ、 sacramentが行われるという「教会」の定義の中で、人は全く正しく(あるいは誤って)教えと sacramentという二つの要素だけを保持し、最初のもの、つまり聖なる共同体を見過ごした。聖なる共同体、その中に実存するということへ向かう規定性がある」(SKS 24, 324, NB24:7)。共同体としての教会もキルケゴールにとって必要不可欠なものである。

*13 SKS 22, 194, NB12:97.

*14 大谷愛人によれば、このエントリーはキルケゴールとミュンスターの関係の推移

いる。ミュンスターはデンマークの国教会を統括する事実上の最高指導者といえる存在であったのであり、その意味でミュンスターは既存の体制を象徴する人物であるといえる。そこでキルケゴールは自身について次のように述べている。

私のカテゴリーは単独者である。私の課題は弁証法的統一において、このカテゴリーによって、既存の体制の覚醒であること、数的なもの、党派等から既存の体制を理念的に弁護する (forsvare) ことであった。^{*15}

キルケゴールのミュンスターに対する関係についてここで詳述することはできないが、キルケゴールの活動はこのように「既存の体制」を弁護するためのものであった。そしてその活動は直接的に行われたものではなく、「弁証法」という形で行われたものであるとされる。それは、「キリスト教の運動の弁証法のすべてを理念的に無条件に展開する」ことによって、「既存の体制を追いつめ」、そのことによって、既存の体制を覚醒させる目的を持っていた^{*16}。

このようにキルケゴールが、自身を修正剤として意識していたのである以上、既存の体制は、彼の著作活動にとって必要不可欠のものであったと言える。

次にキルケゴールが既存の体制をどのように評価し、どのような点にその必要性を感じていたかを見るために『アドラーの書』における「標準的な単独者 (den ordentlige Enkelte)」と「特別な単独者 (den særlige Enkelte)」との関係を見てみたい。

まずそこでキルケゴールは、標準的な単独者について「単独者が単に彼の生活において既存の体制を再生産する」際に、「標準的な単独者として既存の体制に関り」、「既存の体制の生を彼の実存の内て展開する」と述べている^{*17}。

を総括したものである。cf. 大谷愛人『キルケゴール教会闘争の研究』、勁草書房、2007年、670-687頁。

*15 SKS 24, 399, NB24:125.

*16 Ibid.

*17 SKS 15, 125.

キルケゴールによれば「良心や神に対する責任において、つまり自分の永遠なる意識によって各人は単独者である」のであり、それゆえ国家や国教会に所属する者もまた単独者であるべきであり、あることができる*¹⁸。既存の体制は「一般的なもの (det Almene)」とも言い換えられるが、ここで言われる標準的な単独者は、既存の体制の中で「自らを部分として全体に結びつけ、この再現に忠実であることを彼の課題と考える」者である*¹⁹。しかし注意すべきはそこでキルケゴールが既存の体制に属する者は、特別な単独者、「並外れた者 (Extraordinaire)」であってはならないとしていることである。

「標準的な単独者」に対し「並外れた者」と称される、「特別な単独者」は、既存の体制の外におり、既存の体制に対して新しい出発点をもたらすことをその役割として持っている。並外れた者は「既存の体制の根本前提に関する一つの新しい出発点をもたらすことによって、既存の体制の生命そのものを更新しようとする」者である*²⁰。そのことによって並外れた者は、既存の体制に衝撃を与える。その衝撃は、弁証法的に既存の体制の生命を更新するためのものである。そしてそれと同時に並外れた者もまた既存の体制からの衝撃を受けることとなる。そのため真に並外れた者は一般的なものである既存の体制のために自らを犠牲にしなければならない*²¹。

ここで標準的な単独者と特別な単独者との関係は、さきに見た既存の体制と修正剤の関係と同様のものであるように思われる。標準的な単独者と特別な単独者は、その出発点は異なるが、両者は共通の基準を持っているとされる。それらはどちらがより優位というわけではなく、それぞれが互いに補い合う関係にある。したがって既存の体制は、新しい出発点が受け入れられる土壌として存在していなければならないということもできる。

そのような相補的な関係は、キルケゴールが述べるキリスト教講話と説教との関係にも見ることができる。

キルケゴールは「キリスト教の講話と説教との違い」という表題を持つ1847

* ¹⁸ Ibid.

* ¹⁹ Ibid.

* ²⁰ SKS 15, 126.

* ²¹ SKS 15, 129.

年の日記エントリーにおいて自身のキリスト教講話と既存の体制の内にいる者、すなわち牧師による説教との違いについて次のような議論を展開している。「キリスト教講話はある程度疑いと関わるもの」であるのに対し、「説教は絶対的に唯一の権能（Myndighed）、聖書、キリストの使徒によって行われる」ものである。そのため説教の中で疑いを持たせるような話し方は、「絶対的に異端である」とされている。そして「説教は牧師（聖職者按手 Ordination）を前提とし、キリスト教講話は一般的な人間でもありうる」とされる。

キェルケゴールは講話の中でしばしば自身が「権能を持たない」ことを強調しているが、それに対し説教は権能を持つものによって行われるものである。説教は牧師によってなされ、その説教は聖職按手によって引き継がれる権能によってなされる。そしてその権能は使徒と牧師が共通に持つものである。

4. 既存の体制の役割、権能について

キェルケゴールは『二つの倫理的-宗教的小論文』の中的一篇「天才と使徒の相違」において、天才と使徒とを「質的に異なったもの」とし、その相違を述べる。その最も顕著な違いは、ここでも権能を持つか否かである。使徒が使徒である理由は「神からの権能を持つこと」とされる。またキェルケゴールは「権能は使徒への召命または聖職者按手の特別な質」と述べ、「説教することは、まさに権能を用いることである」とし、使徒と牧師であることは双方とも神の権能によるのである、説教は権能を用いることであるとしている*²²。

天才は時代に先行したものであり、もたらしべき新しいものを持っているが、天才が持つ新しいものは、人類一般に同化されると消え去るものである*²³。天才の規定は内在性の領域にあるものとされ、政治、市民、社会、家庭、教育などと結びつけられる。そこでは、新しいものは、一時的に新しいだけであり、やがてその新しさは消え去ることとなる*²⁴。

それに対しキェルケゴールは、使徒の規定を超越性の領域にあるものとし、使

*²² SKS 11, 103.

*²³ SKS 11, 98.

*²⁴ SKS 11, 103.

徒がもたらすもの、つまり啓示の新しさは人類の発展と関わりを持たず、その新しさはいつまでも存続するとしている*25。

キルケゴールは『アドラーの書』においてキリスト教的なものとしての啓示について次のように述べている。

キリスト教的なものは、だれかキリスト者が現存する以前に存在する。ある者がキリスト者となることができるためには、それが存在するのでなければならぬ。それは、それに従ってある者がキリスト者となったかについて測る規定性を含む。キリスト教的なものは信仰者の内面にも存在するのだが、全ての信仰者の外でその客観的な存立を保っている。要するにここで主体的なものと同観的なもののいかなる同一性もない*26。

このように啓示は人がキリスト者になる以前に存在しなければならず、それは信仰者の外で存立し、信仰者の内で解消されるものではない。啓示は内在性の領域にあるものと異なり、信仰者の中でいつまでも客観的なものとして同一化されえないものである。

啓示を宣べ伝える者として使徒、牧師は権能を持つ。そしてその権能は「教えの深さ、その卓越性、その軽妙さ」といったものではなく、「変わらないままあり続けるもの」であり、「教えを完全に理解することによって手に入れることのできないもの」とされている*27。また同時代の説教は知的な探求や思弁へ向かう思考として批判される。そこで聖書を知的に解釈し、理解しようものにしてと試みられる。しかしキルケゴールは、もし牧師が正しく語るのならば以下のように述べるだろうとしている。

永遠の命はあるというキリストの言葉をわれわれは持っている。これによって事は決定している。ここで問題なのは、頭を悩ますことでも思弁で

* 25 SKS 11, 98.

* 26 SKS 15, 273.

* 27 SKS 11, 102.

もない。問題は、キリストが、学識の意味深長さの性質によってではなく、神的な権能によって、その言葉を述べたということである^{*28}。

説教は知的に解釈されるべきではない。権能はその教えに服従するか否かの選択を聞き手に委ねるものであり、説教とは、知的に解釈できない啓示の出来事をありのままに伝えるものである。権能は使徒への召命、あるいは聖職者接手によって得られるものであり、牧師は引き継がれた権能を用いて説教することによって人々に宣教することを使命としている^{*29}。キェルケゴールは1847年の説教について書かれたエントリーの中で以下のように述べている。

牧師は権能を用いなければならない。彼は人々に、あなたがたは「すべきである」と言わなければならない、もし彼らが彼を殺すとしても、彼は言うべきである、もしすべての者がキリスト教から離れたとしても、彼は言うべきである^{*30}。

このように牧師は説教することによって人々に「すべき」と言わなければならない。牧師は権能を与えられているために、説教することができるのであり、また説教しなければならないのである。

5. 結論

以上キェルケゴールにおいて客観的なものとされた教会や聖書について、既存の体制や説教との関連の中で見た。主体性や個人の決断と言った言葉と結びつけられて論じられることの多いキェルケゴールであるが、1853年のエントリーで言われたように、一般的な人間は、直接的な神-関係を持たないため、先の恩寵である客観的なものを必要とすると考えていた。聖餐式や聖書についての説

* 28 SKS 11, 107.

* 29 ハイน์リッヒ・ロースは、キェルケゴールの権能についての考え方とカトリシズムと親近性を指摘している。cf. ハイน์リッヒ・ロース『キェルケゴールとカトリシズム』、後藤平、美田稔訳、創造社、1972年、41-42頁。

* 30 SKS 20, 261, NB3:32.

教は、既存の体制によって担われるものである。牧師は、権能を聖職者按手によって受け継ぎ、その権能によって人々に聖書の言葉に服従するかしないかの選択を迫る。説教は、主体的信仰に先立って必要とされる客観的なものを伝える。キルケゴールは同時代の知的な解釈に傾いた説教を批判しているが、その批判も既存の体制の必要性からなされた批判であると言える。キルケゴールが自己の役割を修正剤としたことから、既存の体制が必要不可欠なものであったことがうかがわれる。そのようにキルケゴールにおいて聖書や教会といった客観的なものは主体的信仰に先立つものであり、それら自体「最初の恩寵」なのである。